堕ちた勇者が駆けた戦記

ダイちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
堕ちた勇者が駆けた戦記

【Ｎコード】
Ｎ９２５５Ｐ

【作者名】
ダイちゃん

【あらすじ】
魔王を倒し世界を救った六人の勇者達。だが魔王は滅びの間際、勇者達を異世界へと堕とし滅びる。
国と国との騒乱が絶えない異世界で、勇者達は再び戦いへと身を投じる事に成る。
離れ離れになった仲間と新たな仲間。勇者達にとっての二度目の戦記は、どんな終焉を迎えるのだろうか……

第０話（前書き）

初のオリジナル小説になります。（いつもは二次創作です）
今年こそはオリジナルを、と思っていましたので、２０１１年、早々に連載始めさせていただきます。
二次創作の連載と交互更新にしようと思っていますので、不定期連載にはなると思います。（出来るのか不安ではありますが）

出来ましたらお付き合い、よろしくお願い致します。

第0話

ソレはとある魔城の最深部で繰り広げられていた。まさに――――激闘であった。

――――　一人はその手に符を持つ女　――――

「闇焼き尽くす天上の業火よっ、炎天滅鎖！」
言うや女が放った符は炎の鎖と成り、巨大な異形の化物に絡みつく。
「月蝕が始まったわ！　今しか無いっ」
自らの魔力を高めて炎鎖を強め、他の人影に声を飛ばす。
女の名はライナ・クリスティールと言う。この世界で最強と言われた符術士であり、連合軍の軍師でもある女である。

――――　一人は糸で結ばれし二本の小剣を持つ男　――――

「ウネウネと邪魔臭いなっ！」
言うや小剣を投げると、その手の糸に操られ、化物から伸びる触手を縦横に切り裂き突き刺す。
「再生能力が落ちた？　ははは っ！　一気に押せるっ」
その小剣を手に戻し、巨大な影に跳び掛かる。
男の名はクリス・カストゥールと言う。現在戦っている魔王によって滅ぼされた、今は無きカストゥール王国の王だった男である。

――――　一人は四つの宝珠を周囲に浮かべる男　――――

「風よ切り裂く刃を放てっ。水よ凍てつく風と成せっ」
言うや二つの宝珠は光を放ち、冷気の刃が漆黒の魔王に突き刺さる。
「負ける訳にはいかないんだっ！　何があってもっ」
その手を頭上にかざせば、一つの宝珠が炎を纏う。
男の名はダレス・アンダーソンと言う。世界で唯一、精霊宝珠を創造する一族の最後の一人である。

――――　一人は身の丈程もある戦斧を持つ大男　――――

「おおおおおおおおおおっ！」
気合一閃、振り払う戦斧から放たれた闘気は巨大な魔王を深く切り裂く。
「ふんっ。八百年の戦い、ココで幕を下ろしてくれるっ」
再び振り下ろした戦斧から、再び閃光が走り切り裂く。
大男の名はバルガ・メルギムと言う。鬼神と恐れられた世界最強の傭兵であり魔狩人だった。

――――　一人は小さな体に愛らしい容姿の幼い少女　――――

「みんな、ちからをかして、おねがいっ！」
少女が祈れば、辺り一帯の瘴気が光の精霊に掻き消されていった。
「……ぐすっ……ありがとぉ」
その淡い光を帯びた少女は、嬉しそうに光に微笑んでいた。
少女の名はシャルと言う。名前も、力も、いつから存在していたのかすら覚えていない、神話の時代から生きる滅んだ筈の光のエル

フ。

――――　十二人の騎士は同じ甲冑に身を包む　――――

「全騎っ！　突貫っ！」

一人、純白のマントを纏う騎士が高らかに告げる。

「「「「「「「「「「「応っ！」」」」」」」」」」」

目にも止まらぬ速さで襲い掛かり、騎士達はその剣を深く突き刺し、無数の光は魔王ケルビムを貫いた。

彼等はナイツ・オブ・ルーデリアと呼ばれた。ルーデリアと呼ばれるこの世界の守護騎士である十二英霊。

――――　一人は身の丈以上の長大な剣を持つ剣士　――――

「戻れ、ナイツ・オブ・ルーデリア」

剣士が告げると十二騎士は光と成って長大な剣・ラグナレクへと吸い込まれる。

「無へと帰せっ！　ケルビムっ！」

その神速でケルビムの頭上へと身を移し、ラグナレクをケルビムに突き刺した。

剣士の名はグレイ・マグワーニと言う。英霊を宿す神剣・ラグナレクをその手に持つ、ドラゴンスレイヤー。

グレイがラグナレクをケルビムから抜き放った時、地上世界に住む者達と魔王ケルビムとの八百年の長きに渡る戦いが、終結したのだった。

「……やったわね」
「あぁ」
「外の方も、決着が付いたみたいだね」
「……」
「らいなぁ、しゃるおなかすいた～」
「さて、凱旋と行くとしようか」
共に労い、魔王の亡骸を後にしようとした時、ソレは告げる。
【――よ　くぞ、我を討ったものだ……神ならざる身で】
一斉に振り返り構える。ソコには魔王ケルビムの虚ろに開いた目があった。
「ちっ！　まだ生きてやがる」
クリスがその小剣を投げる構えに入れば
【くくく……我はココ迄よ。もはや憎き神々（やつら）を滅ぼす力は無い……我等が争い、始まりの時には存在すらしていなかった貴様等が終わらせるとは、全く……愉快な話よ】
「ならば如何するのです。闇の眷属が崇める神よ」
ライナは符を持ち、一歩前に出る。そして
【なに、大した事では無い。我はココで消える。だがお前達にも消えて貰う。しいて言えば……帳尻か】
「出来るのか？　今の貴様に」
グレイの言葉に、ダレスとバルガも構えを取る。
【ぐふふふ……倒せはせぬよ。だが……コレ位は出来ようさ】
ケルビムが言った瞬間、周囲の空間が漆黒に呑まれた。
「これわっ！」
ダレスが驚愕の表情を浮かべた時、自分達の存在を掻き消すような力場のうねりに巻き込まれ、意識が遠のいていった。

【さらばだ、魔王(我)を討ちし勇者達よ】

やがて闇が消え、魔王ケルビムの魔力が薄れ消え、塩となり、光の粒子となってこの世界から消滅した時、その魔城の最深部の戦いの場に、生きる者は誰も残らなかった。

魔王ケルビムも……魔王を討ち取った六人の勇者達も……その場には、何も残りはしなかったのだった。

そして――――

◇　◇　◇

「あっ！　兄さん、あれ」
「ん？　どうした？　リトス」
妹が指差した先を見れば、一人の女性が森の斜面に倒れていた。駆け寄ってみればその女性は身体中が傷だらけだった。
「酷い怪我」
「取り合えず村まで運ぶぞ。リトス、お前は先に帰ってマージの婆さんを呼んでおいてくれ」
「わかった！」
駆け出す妹を一瞬見やり、青年は傷付き倒れている女性を背負い、自分の村へと急ぎ歩き出した。

――――青年の背で眠る、ライナ・クリスティールが目覚める時、
新しい物語が始まりを告げるのだった。

第1話

「　　――――……ぅ……ぅん」
「っ！」
微かに呻き出した女性の反応に、付き添っていた少女は思わず食い入る様に見詰める。眠る女性、ライナを見つけた少女、リトスであった。
村の自分の家へとライナを運び、村の薬師のマージがライナを診た。手当てをし、眠り続けるライナに付き添う事すでに三日。ようやく現れた反応に声を掛けようか如何しようかとリトスが迷っている。その先で
「……ん……こ、ココは……」
ライナはその瞳を開け、知らない天井へ向けて呟いたのだった。だがその声は、ソレを待ち望んだリトスにとっては何よりの朗報だ。
「気が付きましたか？」
「っ！　……貴女は？」
その綺麗な瞳に見とれながらも
「えっと。私はリトスって言います。え～と……貴女が怪我をして倒れていたので兄さんと私の家にお連れしたんです。って……すいません。分かりますか？」
「……」
「あの……すいません。勝手な事だとは思ったんですけど。その、放って置けなくて……あの……」
「……」
「え、と……ご、ごめんなさ「ありがとう」っ？　……！　い、いいえ！　当たり前の事ですから、はい」
「ふふ。本当に、ありがとう。リトスさん」

「あ～……リトスでいいですから、はい」
「そう。じゃあ、リトス」
「はい」
ライナの声と言葉に安堵したリトスが聞いた言葉は、意外なモノだった。

「ココは何処なのかな？」
「え？」

村の傍で倒れていた筈なのに、ライナはココの場所を聞いた。
「え、と、ココはアイギス村です。貴女は村を囲む森の外れで倒れて居たんですよ」
「アイギス村？」
「えぇ。アイギス村です」
「……アイギス……アイギス……」
「？」
ぼんやりと呟くライナを不思議そうに見詰めるリトスだったが、ライナもまた不思議な感覚の中に在る。彼女は、アイギスなどと言う村は聞いた事が無い。無論、世界の中の小さな村の名一つ。知らないとて不思議は無いが、ライナは周囲に満ちる大気や精霊に若干の違和感を感じていた。だからこそ、問う。
「ごめんなさいね、リトス……一つ、いえ、二つ、教えてくれるかしら」
「？　はい、良いですけど」
「ありがとう」
何をかしこまるのかは理解出来ないが、聞かれて教えられない事など自分には無いリトスに、放たれた疑問は意外なモノだった。

「この村を治めるのは何と言う国なのかしら？」
「え？　この地を治めるのはハルテュー王国です。ココはナルティ

ス国王の弟君のムスクル様の収めるハルティス領にあります」
「ハルテュー王国……」
「？　それがどうかしましたか？」
噛み締める様に呟くライナの様子を眺めるが
「そう……それじゃあ、今の暦は分かるかしら？」
「暦、ですか？　勿論、ファイリー暦四百九十八年の火の月ですけど……それがどうかしましたか？」
「……そう……」
「あの……」

目を閉じるライナを不安気味に見詰める。ライナは仲間と共に討った魔王を思う。
（流石はケルビムと言ったところね……異世界へと消し去るなんて。帳尻とはよく言ったものだわ）

知らない国と知らない暦。

ココは自分の居た世界とは異なると理解した。時が違うのか世界そのものが違うのか、ソレははっきりとは分からないが、確かな事は只一つ。ココが、今迄自分達の居た世界では無い事は確かの様だった。
異世界。と言う事態に際してもライナがさした動揺を見せないのは、彼女にとってソレは驚きに値しないからに他ならない。妖精界、天上界、魔界、精霊界、時の狭間――ライナ達はその戦いの旅路の中で、様々な異界へと足を踏み入れて来た。全ては魔王ケルビムを倒す為に。その彼女にとって、自分達が帰属していた地上界が唯一の人間世界だなどと云う認識は無い。自分達とは異なる世界が在ったとしてもソレは驚愕にも否定にも値しない。人間の知識は狭量であり、神魔の世界観は人間の知識（それ）で測る事など出来はしないと知っているから。

目を開け、ゆっくりと布団から上半身を起こすライナに
「あ、駄目です。まだ傷は癒えていないんですから」
確かに、ライナの身体には包帯が巻かれているのだが、左腕のソレをゆっくりと解けば「え？　……そんな」ソコには傷跡一つ有りはしなかった。
「ふふ、私って人よりも傷の治りが速いの」
「でも……貴女の傷は深「ライナ」へ？」
遮って放たれた言葉に思考が追いつかないが
「私の名前よ。ライナって呼んで欲しいかな」
「え、とっ。はい！　ライナさん」
「ふふ。よろしく」
優雅に差し出された手を握り、握手を交わしたライナとリトスだった。

◇　◇　◇

階段をドタドタと昇る足音が聞えれば
「リトス！　あの人が目を覚ましたってホン「へ？」ト……か……あ」
リトスの視線の先には固まる兄の姿が在り、固まる兄の視線の先には、「あら？」と包帯を解き服を着ようとしている半裸のライナが居た。
「あ……コレは、その……」
「兄さ～～～ん……」
「待て、リトス。コレは偶然であって、決してワザとじゃ」
必死で言い訳を言ってみたが
「いいから出てけーーーっ！」

「ぐわっーーーーーーー」
ガンっ！　と花瓶の直撃を喰らい階段を転がり落ちていく兄であった。

「え～……さっきは申し訳ありませんでした」
ライナの前で土下座をしている男に
「ふふふ。別に気にしていませんから、頭を上げて下さい。元々助けられたのは私なのですから、礼を言うのは私の方です。どうも……ありがとう御座いました」
「い、いえ。そんな、当然の事をしたまでだ」
逆に頭を下げるライナに慌てるも
「そうですよライナさん。助けるのは当然です。そして兄さんが土下座するのも当然ですから」
「いや、だからアレは「アレは？」……いえ、すいませんでした」
再び小さくなってしまう。そんな兄妹のやり取りに笑顔を見せながら
「もう本当にいいですから。私はライナ、ライナ・クリスティールと申します。どうかよろしく」
「あ、俺はアトムだ。こっちは妹の「リトスさんですね、さっき伺いましたから」ん？　そうか、とにかく、よろしく」
「はい」
アトムと握手を交わし、再び微笑むライナ。思わずアトムは見とれてしまうが「……鼻の下、伸びてるよ」のリトスの言葉に「ば！　馬鹿な事言うなっ！」と赤面するアトムであった。
ライナは誰の目から見ても美女であり、アトムなどはライナの半裸を見てしまったものだから無理も無いだろう。ライナ本人にとってみれば自分の裸などには何の価値も置いてはいない。その理由は、また別の話になるであろう。

どうしてあんな所に？　あんな怪我で？

互いの名乗りを上げ、幾分会話も落ち着いて来た時を見計らいリトスはライナに聞いたが、それに返すライナの話はアトムとリトスを驚かせた。

彼女が異世界から飛ばされた事。怪我はその際に負ったで有ろう事。

無論、ライナとは違いアトム達にとってみれば異世界等は信じられない話だ。だが、それすらもどうでも良い様に話すライナは「まぁ、これからは私もこの世界で暮らす事になるのでしょう。帰る術など無いのですから。それに……」と陰りを見せる。

ライナには分かっている。どの道、例え帰る方法が有ったとしても、自分達は元の世界には戻らない方が良いのだと。

魔王を倒したあの世界に待っているのは、今度は人間同士の領地争いや権力闘争だろう。そしてその中で、魔王を倒し英雄扱いされる自分達には重要な駒としての役割が振り当てられてしまう。強過ぎる自分達の力は決戦兵器としての位置付けも充分に予想される。居なければそれで済むと言う問題でも無いだろうが、おそらく自分達はもう、あの世界にとって居るよりは居ない方が良い存在となってしまった。

言葉を切ったライナに不審を覚えないでも無い。だが

「ま、だったらこの村に居れば良いさ。ライナみたいな美人なら大歓迎だ」

「もうっ、兄さんったら。美人じゃなくても大歓迎なのっ！」

「じょ、冗談だって」

「ふふ、ありがとう、アトム、リトス」

こうしてライナはアイギス村の一人として迎えられる事になったのだった。

第2話

「ワシが、この村の村長、アルトスじゃよ」
「不意のお目通り、恐縮致します。ライナ・クリスティールと申します。この度、アルトス様のお孫様御二方に救われこの村を訪れる事となりました」
穏やかに上座に座る老人、アルトスの前へ通されたライナは恭しく頭を下げる。そんなライナに若干の驚きを見せるアトムとリトスだったが、アルトスは穏やかに見詰めるだけだった。
「ちょ、ライナ。なにもそんなに頭を下げなくても」
「そうよ。お爺ちゃんは別に王様じゃないんだからそんなに」
二人にとってはアルトスは優しい祖父であった。
「村の長です。訪れた私には礼を尽くす道理があります……アルトス様、早々に不躾では御座いますが、一つ、願いの議があります」
「なにかね？」
彼にはライナの望みが分かっているのだろう。その表情は穏やかだ。そして、それは予想通りに、ライナの口からもたらされたのだった。

「私の、この村への滞在を、お許し下さい」

「ようこそ、アイギスの村へ。歓迎するよ、ライナさん」
「ありがとう御座います。アルトス様」

顔を上げ穏やかに笑みを浮かべて見詰めあうライナとアルトス。
こうして、ライナはアイギス村へと迎えられる事になったのだった。

◇　◇　◇

ライナがアイギスの村にとけ込むまでそう時間は掛からなかった。それは村人の穏やかな風潮とライナの人柄、その両方がかみ合ってこそのものと言えるだろう。

ライナは元の世界で得ていた知識を村の為に使う事を惜しまなかった。

この世界は概ねかつての世界と同じ感じだろう。生息する植物や動物に若干の違いは有るものの、それはそうかけ離れたものじゃない。二つの世界の最も大きな違いは、かの世界には魔物が居て、この世界にはそれは居ない。それが決定的な違いで有り、ライナにとっては絶対的な違いだった。

いつか、魔物の居ない世界を。

その想いを胸に皆が戦っていたあの世界。あの時。魔王を倒し、確かに訪れた筈の平和な世界を自分が見る事は叶わなかった。だがこうして今、そんな世界を目にする事が出来た。彼女にとって、この世界は夢にまで見た世界だった。

「今日も良い天気ね」

自分にあてがわれた家を出ると太陽は空の最も高い所へと姿を現していた。

「随分と寝呆すけだの」

「っ！　アルトス様」

「ほっほ」

少し驚いた風を見せる。気配を感じていなかった訳ではないが、敢えて感知しない様に心掛けていた。きっとこの村にはそれが合う

のだろうと思う。
「昨日リトスに珍しい薬草を頂きましたから、その調合で時間を忘れてしまいました。どちらかと言うと今から寝たい気分です」
「ほ？　お主の薬は効くからのぉ。じゃが、そうか、これから眠るか」
「？　アルトス様？」
この老人が何か考え込む仕草を見せるのは珍しい事だったが、何か有るのかと首を傾げるが
「いや、ちょっと散歩に出たんじゃが、良かったらお前さんも一緒にどうかと思ってたんじゃが」
にこやかに微笑むアルトスにライナの心も和む。
「あら？　私で宜しいんですか？」
「老いぼれの相手ですまんがの？　こう見えても若い頃は良い男だったんじゃが」
「今でも充分に素敵ですわよ」
「しかし、疲れているところに無理は言えぬな」
振り返り帰ろうとするアルトスの腕に、細い腕が絡まる。
「ほ？」
「折角の素敵な男性からのお誘いですから、逃す手はありませんわね」
「いやいや、照れるの」
「ふふふ」

こうしてライナはアルトスと共に昼下がりのアイギス村の散歩へと繰り出したのだった。

アイギスの村は山に囲まれ、自らの田畑と川と山で捕れる生き物とで暮らしを立てていた。豊かな土地で実る作物は大きな村や町へと売られ村の生計を成り立たせ、豊かでは無いにせよ困窮の生活を

味合わずに済む程度に過ごす事が出来た。
二人で歩いているとあちらこちらから「長！」「これは、アルトス様」など、村人からの声が掛かる。村長のアルトスは村人からとても慕われているのが伺える。

ふ、とアルトスが足を止めれば
「それは？」
畑に何かを撒いている村人に目を向ける。
「あぁ。これはぁ、なんか知りませんけどね？　こうして畑に撒いとくと成長が良いみたいなんですよ」
「はて？」
不思議そうに自分を見るアルトスに笑顔を見せて
「あれは肥料です」
「肥料？」
アルトスには馴染みの無い言葉だ。
「内容物はそれぞれ使い道も無い様な物ですが、きちんと調合すれば作物へ栄養を与える事が出来るんですよ」
「ほ～」
どこか納得した風を見せ、二人はまた歩き出した。

少し歩けば子供達が水路で遊んでいる。
「あー！　爺ちゃんだー！」
「爺ちゃんがライナと遊んでるー！」
わいわいと騒ぎ遊ぶ子供達に笑顔を見せ、「お前達は元気だのう」と頭を撫でていた。
「こうして……こう。ほら」
ライナが草の葉で船を作ればそれを水路に浮かべる。水路を進む草船を「おーーーー」と追いかけ駆け出す子供達を見詰めていると

「器用なものじゃな」
「それほどでも」
ライナも腰を上げ立ち上がる。
「それにしても」
「？」
辺りを眺めるアルトスを不思議に思えば
「村の中を川が走るか」と呟いていた。

ライナは村に流れる川に水車を取り付け、村の中に水路を走らせた。その水路によってこう配に関係無く作地に水分を供給する事が可能になる。アイギスの農作物にとって、それは大きな恵みとなっていた。
「皆さんのお力があって始めての、ですよ」
「お前さんの知恵あっての事じゃろうが」
「違いますよ」
アルトスの言葉をはっきりと否定し、ライナもまた同じ景色を眺める。
「手にまめを作り額に汗した者達が、ただその汗を誇れば良いんです。いつの世も、最も尊い者とは汗し働き日常を皆と共に穏やかに過す、そんな者達でありましょう……千の武勲を立てようと、難攻の城落す策を生み出そうと、それが如何程の価値を持つのでしょう……ただ日々を平和に暮らせる。皆、たったそれだけを目指して生きているのですから」
「たった、それだけの事かよ」
「えぇ……それだけの事です。この村では誰でも出来ている。それなのに、どうして難しいのでしょうね……たったそれだけの事が」
「さてのぉ」
アルトスはライナの瞳に影を見咎めるがあえて口には出さない。ライナが今、何を思い、何を憂いてこの平和な景色を眺めているのか。それは自分には分からない。おそらくは彼女の過去であり現実

なのだろうとは思う。だったらそれは
「わしには難しい事は分からんがの。それこそあまり考え悩む程の事でも有るまいて」
「アルトス様？」
「この村じゃ、たったそれだけの事じゃて」
「……」
自分の歩んで来た戦いの道程を噛み締めた。そんな自分の想いを何事も無く呑み込んだ老人に、一瞬、目を奪われる。だが心地良いと感じる。感じる事が出来る様になった自分をどこか不思議に思えたライナだった。

少し歩けば見下ろす広場で数人の男達が木刀を振るっていた。見ればそれを眺めているリトスが。
「リトス」
ライナの声に振り返れば二人の姿が
「っ！　お爺ちゃん、ライナさん」
「こんにちわリトス」
「あ奴等も精が出るのぉ」
リトスと共に広場の数人を見詰める。
「あれは？」
「うん？」
ライナの疑問にアルトスではなく
「自警団です。兄さんが団長なんですよ」
リトスは自慢気に笑みを漏らして皆を見ている。
そう、とぼんやりと眺めるライナに「ほっほ」と小さく笑いアルトスは芝生の坂に腰を下ろすと
「どうかね？　アトム達は」
殊更に大きく尋ねる。すぐ横に居るライナやリトスに話しかける様に。だがしっかりとアトム達にも聞える様に話しているのが分か

る。中には分かり易い位に気合が入り出した者も居る。
ライナは、ん？　とアルトスを見るが目を細めて笑うアルトスに苦笑を洩らしてしまう。この老人は、もしかしたら何でも見通してしまっているのではないかとも思えてしまう。まぁ、アルトスの考えも分からないでは無い。ライナの目から見ても、彼等はその時機だろうと思う。だからこそ――

「そうですねぇ……まぁまぁなんじゃないでしょうか」

――ここは乗っておく事にしよう。

ライナの言葉に思わず皆の手が止まる。そんな自警団の様子に「ちょ、ライナさん」とリトスは慌てるのだが、ライナとアルトスは全く気が付かない風だ。
「ほっほ。まぁまぁかよ」
「えぇ。そうですねぇ、この様な辺境にあっては、まぁ用は成せる程度にはお強いかとは思いますわ」
「そうかいそうかい。用が足りりゃあそれでええて」
「はい。まったくですね」
あはははは、と笑いあう二人だったが、それでは納得のいかない者達がいる。そんな中から歩み出たのはやはりアトムだった。
「爺さん、ライナ……それはどう言う事だ」
「ん？」
「あら？」
剣呑なアトムの言葉に、まるで聞かれているとは思いもしなかったとばかりに注意を向けるが
「おほっ。こりゃすまんかったの。聞えとったか」
「別に深い意味はありませんよ。皆さん、目的を果たせるだけのお強さだと言っただけです」
どこまでも笑顔で、とことん気に障る。

「辺境の田舎者にしては、か？」
見ればアトムだけでは無い。アトムの背後には自警団の者達、二十人程の若者達も集まっていた。皆、その真剣な表情に怒りを見せていた。村を守る為にと自分達なりに決意し鍛錬してきた。それをまぁまぁと言われては頭にも血が昇ると言うものだ。
そんな怒気を隠そうともせずに睨む男達と、相も変わらず笑顔を見せる祖父とライナ。リトスはもう何をどうしたら良いのかも分からずに、思わず瞳に涙が滲んでしまいそうになった時、ライナは、ふ、とリトスに向き合い片目を閉じてウインクをしてみせると、そのまま綺麗な笑顔でアトム達に向き合った。
「困りましたね～。別に私は皆さんが弱いと言った覚えは無いんですけど。そうですね～、上・中・下で表すとするなら、差し詰め皆さんの実力は……」
皆がライナの次の言葉を待ってみれば、彼女はきっぱりと言い切った。

「下の上！　と言ったところでしょうか」

ライナは笑顔のままに言い切った。
アルトスなどは「こいつは手厳しいのぉ」などと一緒になって笑っているが、アトム達はそうはいかない。みな口々に「なんだと！」や「何も分からないくせに！」など、今にも襲い掛からんばかりの気勢だ。そんな中、アトムは皆を制し、ライナに視線をぶつける。
「俺達が下の上、だと？」
「えぇ。あ、これでも可也の贔屓目に見て、って事なんですから、あまり自信を持ってはいけませんよ」
「だとしたらアンタはどうなんだ？　下の下か？」
「え？　私、ですか？」
アトムの言葉が物凄く意外だ。と言わんばかりに目を見開いたかと思えば、ライナは言う。

「私は……」
少し、目を閉じ、開けた時にはやはり綺麗な笑顔で
「上の上の、そのまた上！　ってところでしょうか」

彼女の真実を、言ってのけた。
もう限界だ。とばかりに膨れ上がった気勢を「ほっほっほ」とアルトスの笑い声が抑えると
「ふむ。ならばどうじゃ？　ライナさんや。ここは一つ、こやつ等に指南してやってはどうかの？」
ライナに自警団達に教えてやれ。彼はそう言った。流石にここまで言われてはアトムでも仲間を抑えきれないだろう。と、言うより、アトム自身が自分の怒りを抑えられそうには無かった。そんな彼等を眺めては
「そうですね～。誰かに剣を教えると云うのは私も経験が有りませんし、私自身、元々剣士ではありませんので」
「ライナさん」
リトスはようやくライナが兄達への挑発とも取れる行為を止めてくれたと思ったのだったが
「皆さんを叩き伏せて差し上げると言うのは如何でしょうか。その方が分かり易いでしょう」
「なっ！」
ライナは火に油を注いだのだった。
言われたアトム達としては、もう冗談で済ます積りは無い。ライナが女である以上、剣を抜いて！　とまで言う気は無いが、只で済ます積りももはや無い。
「その言葉、分かって言ってるんだろうな？」
「ちょ！　兄さんっ。別にライナさんも悪気が」
「もちろん。手加減はしてあげますよ」
「ライナさんっ」

兄とライナに挟まれて右往左往するリトスを、アルトスは楽しげに眺めるだけだ。
「そうですね～。私は手加減するとして、皆さんには本気を出して頂かなければ意味は有りませんから……そうだっ！　こうしましょう」
まさに名案！　とばかりに手を胸元で合わせたライナは、楽しい遊びを発表するように宣言した
「私から一本でも取れたら、今晩一晩、その方のお相手をさせていただきましょう」

一瞬、時が止まった。
「ほっほ。こりゃ凄いの」
アルトスが本当に楽しそうに声を上げるが「ラララララライナさん！」リトスはライナに詰め寄っていた。
「ななな何を言ってるんですかライナさん」
「あら？　リトスも参加したいの？　もう、リトスだったらそんな事しなくてもいつでもお相手して上げるのに」
「ちょ！　変なとこ触らないで下さ！　ってそんな場合じゃないでしょ！」
「ん？　そうね……やっぱり夜になってからよね」
「ライナさんっ！」
リトスとしては誰がどう見ても美女のライナがそんな事を持ち出せばどういう事に成るか。色々と分かり過ぎるだけに必死なのだが、如何せんライナの方には緊張感の欠片も感じられない。そして、事態はリトスの考え通りに
「自分の言った事を分かってるんだろうな」
アトム達の目は真剣そのものだ。ライナとの夜。を考えての者も

居るだろう、そこまでして馬鹿にされた事への怒りもあるだろう。どの様な動機にせよ、もう事態は互いの剣を交えるしか無い所まで進んでしまった。
「分かってますよ。その代わり私が勝ったら、その人には村の雑用を申し付けますから。それで良いかしら？」
「あぁ、構わん」
ここに、勝負の配当は出揃った。

「それじゃあ……」

ライナは広場へと降り、隅に捨て置かれていた木刀を一本手に取り、優雅に振るって告げた。

「始めましょうか」

それは、既に試合ですら無かった。

「ヴァイス。始めから二撃目を考えて攻撃してどうするの？　まずは一撃！　続く二撃目は身体が自然と動く。その為の練習よ」
ヴァイスの刀を弾き飛ばし、「は～い。ヴァイスはムーランさんの畑の草むしりに出っぱ～つ！」彼の尻を木刀で叩く。
「コニス～？　力自慢は良いけどね？　誇る事と自惚れる事は違うのよ。貴方の力自慢はただの勘違い。まず自分の力を正当に評価なさい。全てはそれからよ」
交じらせた木刀ごとコニスを吹き飛ばせば「はい！　コニスはそのままアスランさんの家に言って納屋の修復！　走って走って！」

起き上がり、彼は走り出す。

「ヒュージ。ねぇヒュージ。速さを武器にするのなら視界を広く持ちなさいな。目にも止まらぬ速さで動いても、誰も視界から逃がしちゃ駄目。動けば良いってものじゃないの、よっと！」

しゃがみこんでヒュージの視界から外れ彼の足を木刀ですくうと「よーし。君はジブリーさんとこの水路の泥さらいに行った行ったー」転がり回った土だらけのヒュージが駆けて行く。

ライナは強かった。いや、実際彼女は向こうの世界では英雄であり勇者だ。人も獣も、魔物さえも凌駕する神の眷族たる魔王に戦いを挑み勝利を手にした者達の一人。弱い筈も弱い道理もある訳は無い。彼女自身が何よりも実感している。

自分は、自分達はもう、人間とは呼べない存在へと成ってしまった事を。

実戦では使った事も無い剣を持っても、おそらく上位の騎士すら圧倒出来る自信がある。剣技も流派も基礎も、ライナにはなにも無い。だが彼女は強い。ただひたすらに、戦うと云う行為そのものにおいて、彼女は強者だった。

気が付けば残るはアトムただ一人となっていた。今では多くの村人がその様子を観に集まり、村中で自警団の労働が観て取れる有様だった。

「さて。貴方で最後になりましたね？　アトム」

「……」

笑顔のライナに対し、無言で構えを取る。勝負の後の事などもう考えては居ない。余計な思考は邪魔だと感じる。それほどに、ライナの力はアトムに緊張を促す。そんなアトムの構えを見れば

「あら？　さすが団長さんね。他の皆とはちょっと違うかな」
「ちょっとか？」
ジリジリと間合いを詰める。
「そうね……中の下って位かな。うん。流石流石」
「そいつはどうも……それじゃあ」
悪口でも何でもない。彼女はそれを言うだけの力を持っている。
それはもう充分に理解していた。だったら後は持てる全てでぶつかるのみ。

「いくぞーーー」

駆け出したアトムをライナは満面の笑みを持って迎えたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9255p/

堕ちた勇者が駆けた戦記

2011年1月27日01時10分発行